

2. 研究の詳細

プロジェクト名	文章・談話構造から見る係り結び構文の研究		
プロジェクト期間	平成29年度		
申請代表者 (所属講座等)	勝又 隆 (国語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	

①研究の目的

古代日本語が近代語へと移り変わる過程で終止形と連体形の合一（連体形への統合）や係り結びの衰退が起きた。また、現代語では「太郎が花束を持ってきた」のように、主語や目的語を格助詞ガ・ヲによってマークするのが一般的だが、古代語においては「楫取、また鯛持て来たり」（『土佐日記』）のように、主節述語が終止形の場合、主節の主語や目的語は、格助詞でマークされないのが原則であった。

古代日本語において係り結び構文を構成する係助詞（ゾ（ソ）・ナム（ナモ）・ヤ・カ・コソ）は、主語や目的語に限らず、他の補語や副詞、従属節といったさまざまな文の要素に下接する。しかし、出現頻度で言えば、主語や目的語に下接する例が多い。古代日本語と現代日本語の違いと変遷過程を記述し、その言語変化の動因を明らかにするには、係り結び構文の機能や役割を明らかにすることが前提となる。

本研究は、古代日本語における確言系（ゾ・ナム・コソ）の係り結び構文について、文章構成や談話構造上の特徴を観察することを通して、その特徴がこれらの構文の持つどのような機能の反映であるかについて考察し、ひいては、古代日本語の文終止体系における、係り結び構文の位置づけを明らかにするための基礎とすることを目的とする。

②研究の内容

本研究で主として扱う係り結び構文は、いわゆる確言系の係助詞ゾ（ソ）・ナム・コソによる係り結びである。具体的には、文中に助詞ゾ（ソ）・ナム（ナモ）・コソが現れ、ゾ・ナムであれば文末が連体形、コソであれば已然形で終止する構文のことであり、学校教育においても中学校から登場し、高等学校で正式に学習する。

学校教育ではこれらの三つの構文の意味は「強調」として教えられているが、「強調」のニュアンスで解釈しない方が理解しやすい（現代語訳するのであれば「無視」して訳した方がうまく訳せる）例も少なくない。

つまり、「強調」という理解の仕方では正確に理解したことにならず、古典学習者（特に平安時代語で書かれた文章を読む者）にとっては、読解に役立っているとは言えないのである。これは教科書が現代の研究水準を反映していないからではない。係り結びの研究は、江戸時代に本居宣長によって整理されて以降、現代に至るまで研究され続けてはいるが、結局「どういう役割を果たしている構文なのか」ということは明らかになっていない。

もちろん、文体による出現率の差や、述部に現れる助動詞の種類の違い、語順に関する特徴、原則等、細部はさまざまに明らかにされてきている。しかし、肝心の「意味」に関しては「卓立の強調」とする見解に留まっている。「卓立の強調」とはプロミネンスとも言い、現代語で言えば、「太郎が九時に来た」の「太郎が」を強く言う、「次郎でも三郎でもなく、太郎が」というニュアンスが生じ、「九時に」を強く言う、「他でもない九時に（思ったより早い遅い）」等のニュアンスが生じるというタイプの強調の仕方である。

構文的特徴などからは「卓立の強調」と見ても矛盾は生じないものの、すでに述べたとおり、このような特殊なニュアンス（言外の意味）を読み取らない方が理解しやすい文脈でも、確言系の係り結び構文は少なからず用いられている。したがって、「卓立の強調」と考えておくと理解しやすい用例も多いものの、十分な説明が成されているとは言いがたい状況にある。

唯一、小松英雄氏がその著書『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』（1999年、笠間書院）、『日本語を動的にとらえることばは使い手が進化させる』（2014年、笠間書院）の中で、「係り結び」をある程度まとめた長さの文章（＝談話）の中でとらえるべきことを具体例を交えて主張している。ただし、いずれも一般向けの書籍であり、研究論文のように先行研究を網羅した上で調査範囲を明らかにし、詳細に論じたものではないため、十分に立証されたものではない。

そこで本研究では、係り結び構文を観察する最小の単位を「談話」（まとまった内容の文章のひとまとまり、「段落」に概ね相当）とし、最大の単位を一作品全体とし、係り結び構文が、文脈の中でどのような役割を果た

しているのか（例えば、情報の補足なのか、因果関係を構築するのか、話題提供なのか等）に注目する。

また、それが係り結び構文のどのような機能の反映であるのかを明らかにするための基礎的な調査として、係助詞がマークする語句（係助詞の直上の語句）と結びの述語との文法的な関係についても調べ、その結果が文章・談話における特徴と矛盾無く説明できるものなのかを検討する。その結果や先行研究の成果などを踏まえ、係り結び構文の文章・談話における特徴が、係り結び構文のどのような機能を反映したものであるのかを明らかにしていく。

③研究の方法・進め方

本研究期間（平成29年度）においては、以下の調査・考察を行った。

- (1) 中古の散文作品（『竹取物語』、『宇津保物語』（巻之一）、『源氏物語』（若紫））の地の文を中心に、ゾ・ナム・コソの係り結び構文が、どのような文脈でどのような情報を示す文に用いられているのかを観察した。
- (2) 会話文についても同様の観察を行い、(1)とゾ・ナム・コソの先行研究も踏まえ、それぞれの構文における文章構成・談話構造上の役割の違いについて考察した。
- (3) 上代の歌集である『万葉集』を対象に、ソ（ゾ）による係り結び構文の承接語句と結びの述語との関係と、連体修飾節の述語と被修飾名詞との関係を比較し、他の係り結び構文の場合も踏まえ、ソ（ゾ）による係り結び構文によって「焦点化」されているように見える要素の特徴について考察した。

平成30年度以降は、まず、(1)(2)(3)それぞれの資料の未調査部分の調査を終えるとともに、調査範囲を広げる。時代については、(1)(2)については上代、(3)については中古も対象とする。ジャンルについても、物語や歌集だけでなく、日記や歌物語、随筆、歌論などについても扱う。

また、(3)について、平成29年度は承接語句と述語の関係だけを調査対象としていたが、これに「焦点」となる情報が何かという観点も加えることで、文章・談話における役割を明らかにすることにつなげていく。

さらに、承接語句別の「焦点」について分析することで、文単位で見た場合の係り結び構文の機能を明らかにする。そして、文章・談話単位で見た場合の特徴・役割との関係について考察し、古代日本語における係り結び構文の文終止体系における位置づけを考える基礎とする。

④実施体制

本研究は、申請者が単独で実施した。

⑤平成29年度実施による研究成果

平成29年度実施による、主な研究成果は以下のとおりである。

- (1) 『竹取物語』、『宇津保物語』（巻之一）、『源氏物語』（若紫）の地の文に現れるゾ・ナムは、先行研究（小松（1999）、（2014））に指摘があるように、段落や話題の切れ目に現れる例が多く、ナムが段落や場面の切れ目、ゾがより小さな話題の切れ目を作っているという傾向も確認できた。しかし、次のaの用例のように、同じ段落（話題）においてナムが連続して用いられ、しかも段落の切れ目ではない例もしばしば見られるため、話題の切れ目という把握の仕方では不十分である。

a いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。 (『竹取物語』)

そこで、段落の切れ目と見なせる例も含めて、ゾ・ナムの係り結び構文の前後を観察し直した結果、ゾ・ナムの場合は原則として、直前の文までで言及された事物・事態に関する補足説明をする際に用いられていることがわかった。

b 翁、竹を取ること、久しくなりぬ。勢、猛の者になりけり。この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず招ひ集へて、いとかしこく遊ぶ。

(『竹取物語』)

c 「あこぎ」が姫君のために、姫君が少将を迎えるための準備をあれこれとしているが、肝心の姫君はふさぎ込んでしまっている場面

さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合はすべき人もなければ、心一つをちぢになして、(中略)君は物もおぼえで臥したまへるを、おまし直さむとひき起こしたてまつれば、面赤みてげに苦しげなるまで、御目も泣きはれたまへり。いとほしうあはれにて、「御髪搔きくだしたまへ」と、おとなおとなしうつくるへど、「心地あし」とて、ただ臥しに臥しぬ。【この君はいささか御調度持たまへける。母君の御物なりけり。鏡などなむ、まめやかにかうつくしげなりける。】「これをだにも、持たまへらましかば」と言ひて、かきのごひて枕がみに置く。(『宇津保物語』)

b の例では、三日間にわたってお祝いの遊びをしたという文に続いて「よろづの遊びをぞしける」とゾの係り結びが現れている。続く文は再び「いとかしこく遊ぶ」と遊びの話が続いており、話題は変わっていない。また、この後には、世の男達がかぐや姫に夢中になったという話が続いている。

「男はうけきはらず招び集へて」という部分から、男達を皆呼んだため評判が広まったのだということがわかるため、「男はうけきはらず」というのは、その後の展開において重要な描写であることがわかる。一方、ゾで表されている内容は、「よろづの遊び」という情報であり、その後の話の展開上、遊びの種類が再び話題になることはなく、あまり重要な情報ではない。つまり、補足的で話の本筋からは外れる情報を挿入してあるのに過ぎない。

c の例では、【 】の部分が直後の台詞「これをだにも、」の「これ」が何であるかを説明している部分である。物語内の時間としては【 】の前後でつながっており、【 】内は語り手の現在時から「これ」だけでは読み手に伝わらないため、注釈をしている部分と言える。【 】の一文目が「この君はいささか御調度持たまへける。」と連体形止めになっており、終わりが「鏡などなむ、まめやかにかうつくしげなりける」とナムによる連体形結びになっている。「これ」が指しているのは「鏡」であるため、ナムによる係り結びで表されている内容が注釈の中心であり、続く物語内の場面ともつながっている。

a の場合も、一文目の「たけとりの翁」の説明が一文目のナムでなされ、二文目に出てきた「竹」に関する具体的な描写が二文目のナムでなされており、どちらも物語の展開上、重要な情報である。

作品により、地の文におけるゾ・ナムの出現頻度は異なるが、一般的にナムの方が出現頻度が高く、b と a・c の違いのように、ゾの方がより些末な補足情報を補う場合に用いられる傾向にあった。

ナムが段落の終わりに現れやすいのは、物語の展開上、重要な補足を述べることが多い、ナムの特徴を反映したものであると考えられる。

(2) (1) 同様に、会話文についても調査を行った。ナムが対人的な働きかけの機能を持つことは先行研究にも指摘があるが、応答文に注目したところ、質問に答える場合には、ナムが内容的にも直接の答えを担い、ゾはその補足説明として現れ、コソは質問者の意図と離れて話し手が主張したいことを述べる際に現れる傾向にあることがわかった。

d (源氏)「いとあはれにものしたまふことかな。それはとどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行く方の、なほたしかに知らまほしくて、問ひたまへば、(僧都)「亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。それも女にてぞ。それにつけてもの思ひのもよほしになむ、齢の末に思ひたまへ嘆きはべるめ」と聞こえたまふ。さればよ、と思さる。(『源氏物語』若紫)

d は一回の台詞の中にゾ・ナム・コソが一回ずつ用いられている例である。すでに垣間見で姿を見ている若紫について、光源氏が尼君の兄である僧都から情報を引き出そうとして、「尼君の(亡くなった)娘さんには、形見となるお子さんはいないのですか」と尋ね、それに答えた僧都の台詞である。第一声のコソで「(生まれたのは) 亡くなる直前である」と述べ、ゾで「しかも女の子である」と補足し、ナムで「(そういうわけで) 尼君の心配の種になっている」と、光源氏の質問への回答をまとめている。

ここでは、質問に対してやや飛躍した第一声のコソが用いられている。このような、話し手の思いつきを切り出す用法は、従来、コソが主観的な表現であるとされてきた点と対応する特徴と言える。

ゾ・ナムについても(1)と矛盾しない結果である。

(3) 『万葉集』におけるソ(ゾ)による係り結び構文の、「ソの直上に現れる語句と結びの用言」の文法的関係と、連体修飾節(巻15~17)の「被修飾名詞と連体修飾節の述語」の文法的関係について、その出現傾向が類似していることを示した。

係り結び構文における上代の係助詞ソは、文の種類によって以下の文成分に最もよく承接する。

- 1) 他動詞文においては目的語
- 2) 非意志的自動詞文においては主語
- 3) 意志的自動詞文においては主語以外の成分
- 4) 一項形容詞文においては主語

ただし、いずれの場合も他の成分にも承接するため、この現象は承接しやすい要素が文の種類によって異なるという、傾向の問題である。この傾向は、他の係助詞には見られない特徴である。この指摘自体は勝又(2012)「古代日本語における係助詞ソ(ゾ)の出現傾向について」『日本言語学会第145回大会予稿集』日本言語学会において報告済みである。

今回は、『万葉集』の巻15～17を対象に、連体節の述語と被修飾名詞(主名詞)との関係(例えば、「太郎が買った本」なら、「本」は「買った」の目的語)を同様に調査し、上記のソの結果との比較を行った。なお、今回の調査は日本語歴史コーパス(国立国語研究所)で、キーを「連体形」と指定し、後方共起条件を「名詞」として検索し、一例ずつ文法的な関係を確認した471例が対象である。

その結果、以下のような結果が得られた。

- 1) 他動詞：目的語 59例 主語 28例 その他の補語 24例 (格成分でないもの 37例)
- 2) 非意志的自動詞：主語 69例 その他の補語 26例 (同 13例)
- 3) 意志的自動詞：主語 51例 その他の補語 52例(移動のヲ 2例含む) (同 19例)
- 4) 形容詞：主語 52例 その他の補語 3例 (同 6例)

言語類型論においては、他動詞文の目的語と非意志的自動詞文の主語が同様の振る舞いをするのは、一般的に能格言語の特徴とされる。一方、他動詞の主語と自動詞の主語が同様の振る舞いをするのは対格言語の特徴とされる。現代日本語は自動詞の主語も他動詞の主語もガ格を取り、他動詞の目的語はヲ格を取るため、対格言語であるとされている。しかし、ソの係り結び構文では他動詞の目的語と自動詞の主語がよく結びつき、同様に連体節の主名詞との関係も他動詞と目的語、非意志的自動詞と主語の出現が多い。つまり、現代語と異なり、能格言語的振る舞いが見られる。古代語は、①で述べたとおり、主節述語が終止形の場合、主節の主語や目的語は、格助詞でマークされないのが原則であり、そのこととの関連も想定される。

このことは類型論的にも興味深い。係り結び構文の機能の観点から見ると、従来「強調」を表すとされたり、文の「焦点」を表示すると考えられたりしてきた係助詞ソが、なぜ連体節と共通した特徴を持つのかという点が問題となる。他の係り結び構文には見られない特徴であるため、偶然とは考えにくい。

現時点では、「強調」には直接関わっていない可能性や、上代の連体節のあり方と何らかの関わりがある可能性、あるいはその両方の可能性などが考えられるが、今後さらに調査・考察が必要である。

中古についても同様の調査を進めることで、(1)や(2)の傾向におけるゾとナムの違いについて明らかになることが期待される。

⑥研究の今後の展望と予想される成果(学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果)

確言系の係り結び構文の機能については、ゾ・ナム・コソそれぞれ、少しずつ異なる結果が予想される。現時点では、ゾに関しては「強調」は単に傾向としての結果であって、機能ではないという結論が見込まれる。また、承接語句(ゾの直上の語句)による「焦点」の違いの有無を見ることで、各構文の機能について、より詳細な、構文による差異が記述できるものと考えられる。さらに、これを文章・談話における特徴と比べることで、係り結び構文が文章上に現れた際に、「何を読み取れば良いのか」ということがわかるようになることが期待される。従来、学校教育の現場では、「無視」することが係り結び構文の「解釈」の仕方とされてきたが、そこに新たな積極的な解釈の方策を提供することができる。

⑦主な学会発表及び論文等

本研究の一部(⑤の(3))は、平成29年12月16日(土)に実施された名古屋言語研究会例会(第162回)において「上代における連体節と係助詞ソの関係について」という題目で口頭発表を行った。

今後、「③研究の方法・進め方」の平成30年度以降の実施計画に従って研究を進め、研究の段階に応じて学会や研究会等での口頭発表を重ね、学会誌に投稿する予定である。